

令和2年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

本校の役割は、不登校経験者の学び直し、障害や困難を抱える生徒への特別な支援、外国につながる生徒への学習支援など、多岐にわたっている。そうした生徒一人ひとりに対して、先進的な教育手法による基礎学力の保証はもとより、社会で自立して自己実現を図る力を育むことが重要となっている。そのため、今年度は5つの重点課題に取り組んだ。

- (1) 「学習活動」について、単位修得率は昨年度より上昇し、目標はほぼ達成できた。生徒の学習実態について、「学習時間調査」や面談・個別指導の実施により把握した。家庭学習については、昨年度に比して1日当たりの時間に延びが見られたものの、平均70分程度であり、家庭学習のための課題の工夫や進路目標の明確化による内発的動機付け等、生徒の主体的学習活動を促す取り組みの強化が必要である。そのためにも、生徒に興味関心や意欲をもたせるような授業改善に取り組みたい。
- (2) 「学校生活」について、昨年度より取り組んできた「あいさつ」の定着と遅刻の防止については、遅刻防止が目標値に到達した一方、「あいさつ」は十分とは言えず、引き続き指導を継続する必要がある。特別支援教育に関する教員研修会の充実、生徒の心身の健康状態に関する情報共有の促進、ユニバーサルデザイン化に対する教員の意識啓発等を通し、授業のみならず、学校生活全般について本校生徒の実態に即した指導が浸透しつつあり、今後も、個々の生徒が安心して学校生活を送り、自立した人間として他者とともによりよく生きる力を育むことができる学校づくりに努めたい。
- (3) 「進路支援」として、進路決定率は目標を達成できているが、生徒の進路希望が多様化してきており、様々な機会に進路情報を提供し、家庭とも連携しながら進路選択のミスマッチを防ぐことが求められる。コロナ禍により、進路ガイダンス等を予定回数実施できなかったが、リモートでの実施など今後に生かせる対応ができた。キャリアパスポートの効果的な活用や新制度入試への対応等、新たな進路指導の具体化を図り、生徒の学びが自己の将来とつながるよう組織的かつ計画的な進路指導体制の構築が必要である。
- (4) 「特別活動」としては、学校行事に参加した生徒の満足度はどの行事でも高く、他者との協働活動を通し、学校行事が人間形成の一助となっている。一方で、参加率は80%台に留まっており、登校自体難しい生徒の集団活動への参加を工夫し、社会的自立への端緒とする必要がある。図書の出借率については目標値を下回っており、今後は授業での調べ学習や読書を促す図書行事の開催など、図書室の利用についても対策を進める必要がある。
- (5) 「資格取得」は専門学科の生徒の自信につながり進路意欲も高まっている。今年度はコロナ禍による指導機会の減少などにより、合格率が下がった資格もあるが、生徒の実態を踏まえた検定指導の研究や個別指導の工夫により合格率の向上を目指したい。

7 次年度に向けての課題と方策

本校では、多様化する生徒に対応し、以前から学校全体のユニバーサルデザイン化とインクルーシブ教育を組織的に推進してきた。今後も授業改善やICT教育の推進、通級指導による個別指導・個別支援、SC・SSWを活用した教育相談等の一層の充実を図り、生徒一人ひとりの自己実現に資するよう、教職員間のみならず、保護者・地域・外部機関との連携も深めながら、個に応じたきめ細かい教育を実践していきたい。

8 学校アクションプラン

令和2年度 志貴野高校アクションプラン - 1 -			
重点項目	学習活動		
重点課題	・単位修得率の向上（学習習慣の確立と基礎学力の定着を図る） ・生徒の学習実態の把握		
現 状	・安易に授業を休む生徒が見受けられる。 ・学習意欲が低調で、学習習慣が身につけていない生徒がみられる。 ・学力差があり、一斉授業が難しいことがある。		
達成目標	① 単位修得率		② 「学習時間調査」の実施
	90%以上		2回（前期1回、後期1回）
方 策	・日々の「学習の記録」（出席記録、学習時間の記録、学習内容等の記録）を、生徒一人一人に記録させる。 ・生徒が自らの学習の記録を確認することによって、授業に参加することの意義を知る。 ・生徒が利用しやすい『受講ガイド』を作成し、履修指導に生かす。 ・生徒の学力、興味・関心などを把握し、授業に対する興味・関心を引き出す。そこから、生徒の主体的・対話的な学びを促し、出席率、単位修得率の向上につなげる。 ・生徒の実態を、より正確に把握するために面接や個別指導を充実する。		
達 成 度	・単位修得率 91.1%（前期） ・単位修得率 88.3%（後期）		・2回実施
具体的な取組状況	・「学習・生活の手引き」の授業の記録と「キャリアパスポート」の日々の記録を併用しているが、使い分けが定着しにくい。 ・単位修得率について定時授業では増加したが、通信授業においては減少した。		
評 価	B	・前期の単位修得率は目標率を上回ったが、昨年同期と比較すると0.1ポイント減少した。後期の単位修得率は目標率を下回っているが、昨年同期と比較すると0.8ポイント増加した。	B
学校関係者の意見	・「学習・生活の手引き」の授業記録や「キャリアパスポート」は自分の状態を認識し、振り返るツールとして有効である。 ・家庭学習をする生徒が増加しているが、タブレット等を利用した家庭学習やリモートなども模索する必要がある。 ・教わる、一人で学ぶという学習形態のほかにペアラーニング・協働学習等も一つの方法であり、新学習指導要領で示されている主体的対話的で深い学びの実現を目指してほしい。		
次年度へ向けての課題	・「授業の記録」については、「キャリアパスポート」の使い方も含め使いやすいように検討し、その意義を十分に説明する必要がある。 ・タブレット導入を考慮し、これまで以上に家庭での学習が定着するような工夫が必要である。		

評価基準

A：達成した

B：ほぼ達成した

C：どちらかという達成できていない

D：ほとんど達成できなかった

令和2年度 志貴野高校アクションプラン - 2 -

重点項目	学校生活		
重点課題	・ 基本的生活習慣の確立及び自己管理能力の育成 ・ 支援を必要とする生徒のための校内体制の充実		
現 状	・ ネットゲームやSNS、アルバイトなどにより、朝起きられない生徒がいる。また、SNSに関するトラブルが多くみられる。 ・ あいさつ運動期間中は、自発的に挨拶をできる生徒が多いものの、年間を通して挨拶を交わし合える学校になるためには、あいさつ運動に工夫が必要である。 ・ 自分の健康状態を把握できず、適切な対応ができない生徒がみられる。 ・ 周囲と適切な人間関係を築けず、学校生活に支障をきたす生徒がみられる。 ・ 授業や行事などで「困り感」を持った生徒が多数いる。 ・ 高校における特別支援教育や発達障害等について教員が理解を深め、「授業のユニバーサルデザイン化」を一層推進する必要がある。		
達成目標	① 学校生活アンケート a あいさつ・遅刻 b SNSトラブル		②教育相談や特別支援教育に関する 教員研修会・学習会の実施
	a 良好またはおおむね良好 70%以上 b 減少		・ 年6回以上
方 策	・ 毎月「行動・身だしなみ」の自己チェックを行い、前月と現在を比較し自己のあるべき姿について考えさせる。また遅刻欠席が多い生徒に対して生活習慣を見直させる。 ・ 生徒校風委員の主体的な「あいさつ運動」を通して、あいさつの習慣を身に付けさせる。 ・ 志貴野高校ネット安全ルールの見直しを行い、ネット安全教室を実施するなど、健全な利用について考えさせる。		・ プロフィールカードや面談等で、生徒の特性や健康状態、配慮事項等を把握し、年次部会や職員会議で共通理解を図る。 ・ 特別支援教育（発達障害の生徒への対応・通級による指導・授業のユニバーサルデザインなど）や本校生徒の実態に即した教育相談等に関する研修会・学習会を実施する。 ・ 「授業等のユニバーサルデザインに関するアンケート」を実施し、教員側の定着を図る。
達 成 度	・ あいさつをする 58.0%（昨年 57.6%） ・ 遅刻をしない 70.0%（昨年 66.8%） ・ SNSトラブル 大きなトラブルはなし		・ 新着教員オリエンテーションでの説明1回 ・ 教員研修会5回 ・ SC・SSW連絡会2回
具体的な 取組状況	・ 生徒校風委員の主体的な「あいさつ運動」を4回実施した。 ・ 新型コロナウイルスの流行により生徒校風委員会が活動できなかった時期は生徒指導部であいさつ運動を実施した。 ・ 遅刻防止のため職員による校内巡視を行う。 ・ 志貴野高校ネット安全ルールを生徒の現状に合ったものに更新した。		・ プロフィールカードや入学当初の生徒・保護者との面談の実施で実態を把握。 ・ 通級指導など特別支援教育に関する教員向け研修会を5回実施。 ・ SC・SSW連絡会を通じて、精神的に不安定な生徒の現状・対応を協議。 ・ ユニバーサルデザインの定着のため新着教員向けの説明および年2回の教員アンケートの実施。
評 価	B	あいさつについて目標値に届かなかった。	A 計画通りに実施できた。
学校関係者の意見	・ 校風委員を中心に、ネット安全ルールの更新をしたのはよい。高校生のSNSトラブルは少なくはなく、今後も注意していく必要がある。 ・ 特別支援教育は、小・中・高と上級学校へ進むにつれて手薄になっている現状があるが、志貴野高校では、3年前から通級指導も始まり、特別支援教育に対する積み重ねがある。個々の生徒支援のほかに先生に対する研修を行っていることは評価でき、生徒に還元してほしい。		
次年度へ 向けての 課 題	・ 新しい生活習慣に配慮した行事の検討。 ・ コミュニケーションを苦手とする生徒への対応。 ・ 新しい志貴野高校ネット安全ルールの周知。		・ 研修会の内容については、通級の定着のため特別支援教育に関することが主となったが、精神的に不安定な生徒も多く、教育相談や生徒理解に関する研修などの時間が十分に確保できなかった。バランスのよい研修会・学習会を計画したい。

評価基準

A：達成した

B：ほぼ達成した

C：どちらかというと達成できていない

D：ほとんど達成できなかった

重点項目	進路支援			
重点課題	・進路実現に向けて学校全体で支援する体制づくり ・年次の状況に応じた進路支援と主体的な進路選択の促進			
現 状	・進学・就職ともに地元志向が強く、県内及び隣接県への希望者がほとんどである。 ・各年次における生徒状況が異なるため、それぞれに応じた指導が必要である。 ・進学か就職かを決められずにアルバイト継続を選択するなど進路未定者がいる。 ・進路選択でミスマッチになる生徒がいる。			
達成目標	① 希望する進路の内定率の向上		② 計画的・継続的な進路指導の実施	
	進路決定率 90%以上		各年次の進路ガイダンス年3回実施	
方 策	・面接指導や保護者会等をととして生徒や保護者に的確なアドバイスをを行い、進路選択のミスマッチをなくす。 ・新制度入試や新カリキュラムに即した進路指導が、学校全体でできる体制をつくる。		・進路ガイダンス、進路見学会、適性検査、進路講話等を計画的に行うことで、主体的に進路を選択する力を育成するとともに、進路意識の高揚をはかる。 ・ポートフォリオで、日々の行動を記録する習慣をつけさせ、自己の目標に対する振り返りをさせながらキャリア形成をはかる。 ・基礎学力向上講座、一般常識コンクール、面接指導等を計画的に実施することで、学力の向上や定着に努める。	
達 成 度	・95.5%		・新型コロナウイルスの影響で、計画した進路指導が未実施で成果があったとは言い難い。	
具体的な取組状況	・進路希望と適性の確認（ミスマッチ防止） ・J S Tによる面談の活用 ・ハローワーク等校外の機関との連携 ・校内教員進路研修会の実施（スキルアップ） ・校外の進路説明会への参加（情報収集）		・キャリアパスポート等の活用 ・キャリア教育のなかの進路指導の重視 ・学力の3要素の定着化 ・進路選択を広げる奨学金制度等の周知 ・中止された進路行事の補完・代替	
評 価	A	進路未決定生徒の指導を粘り強く行う。	B	各年次で2回は実施することができた。
学校関係者の意見	・コロナの影響がある中、進路決定率のパーセンテージが昨年より高くなっているのはよい。 ・今年度の高校生の就職状況は、売り手市場が一転し、企業の採用状況が厳しくなった。スケジュールの変更等、不透明さが増しているため迅速な情報収集が不可欠である。リモート面接なども導入されてきており、対応していく必要がある。 ・コロナ禍の中、進路を決めかねている生徒の進路指導が重要である。			
次年度へ向けての課題	・新制度入試や新カリキュラムへの更なる対応 ・就職希望者増加への対応		・コロナ禍における効果的な進路指導の模索	

評価基準

A : 達成した

B : ほぼ達成した

C: どちらかというと達成できていない

D: ほとんど達成できなかった

重点項目	特別活動																	
重点課題	・学校行事、ホームルーム活動等における生徒の積極的な参加の促進 ・図書委員会活動の活性化と読書習慣の確立																	
現 状	・生徒会活動や学校行事の参加に消極的な生徒がみられる。また募金活動、ボランティア活動、保育園や障がい者施設での交流などに参加する生徒数が減少傾向にある。 ・図書委員会では高岡市立中央図書館での読み聞かせボランティア、文化祭での展示、図書館だよりの編集を行っているが、参加者が特定の生徒に偏っている。また図書館を利用する生徒も限られ、読書習慣が確立しているとは言えない。																	
達成目標	特別活動に参加した生徒の出席率と満足率		生徒在籍数に対する総貸出冊数の割合															
	90%以上		70%以上															
方 策	・生徒会を中心に、生徒の意見や要望を行事に積極的に取り入れ、参加意識を高める。 ・事後アンケートを実施し、生徒の満足度や問題点を把握する。 ・満足度の低かった生徒の声に耳を傾け、より多くの生徒が充実感を得ることができるよう工夫する。		・図書委員ミーティングを月1回開催し、生徒主体の研修を実施する。 ・リクエスト帳を活用し、図書委員を中心に読書意欲を喚起する。 ・図書館だよりの内容を充実させ、来館者の増加や読書意欲の喚起に努める。 ・HRの時間等を利用して読書指導を行い、図書室の利用を図る。															
達 成 度	<table><thead><tr><th></th><th>出席率</th><th>満足度</th></tr></thead><tbody><tr><td>・校内生活体験発表大会（9月）</td><td>87.1%</td><td>94.4%</td></tr><tr><td>・スポーツ大会（9月）中止</td><td>－</td><td>－</td></tr><tr><td>・文化祭（10月）</td><td>85.4%</td><td>97.1%</td></tr><tr><td>・百人一首カルタ大会（2月）</td><td colspan="2">夜間制のみ実施</td></tr></tbody></table>			出席率	満足度	・校内生活体験発表大会（9月）	87.1%	94.4%	・スポーツ大会（9月）中止	－	－	・文化祭（10月）	85.4%	97.1%	・百人一首カルタ大会（2月）	夜間制のみ実施		・70人（昨年度：96人） ・生徒数236人（昨年度：219人） ・貸出率 30%（昨年度：44%）
	出席率	満足度																
・校内生活体験発表大会（9月）	87.1%	94.4%																
・スポーツ大会（9月）中止	－	－																
・文化祭（10月）	85.4%	97.1%																
・百人一首カルタ大会（2月）	夜間制のみ実施																	
具体的な取組状況	・企画・運営を担当する委員の作業内容を具体的に示し、生徒の興味・関心にも考慮して、生徒が行事に主体的に参加できるよう工夫した。 ・校外のボランティア活動についてはコロナ禍のためほとんど中止となったが、生徒会企画のいちご募金は6月から継続して行っている。		・生徒図書委員会は、『図書館だよりの編集発行や、文化祭で「おすすめ本」の展示・紹介を行うなどの活動を重ねた。 ・コロナ禍により、多くの人が触れる図書への心理的抵抗感を持つ生徒がいるため、返却図書は72時間後、開架するようにした。また利用者が密にならないように座席を配置し、図書室入退室時の手指消毒の徹底を図るなどの衛生対策を行った。															
評 価	B	生徒の満足度は各行事において高い結果を得ているが、出席率については、行事の苦手な生徒の参加を促す工夫等が必要である。	C コロナ禍の影響もあり、図書館の利用は低迷している。安全対策を行っているが、利用者が目標より大幅に下回っている。															
学校関係者の意見	・昨年度より数値目標を上げて90%にしたが、生徒の満足度は高い。生徒は、行事を通して成長し、思い出を作っているが、保護者に対してもオンライン配信等を工夫するとよい。 ・コロナ禍でのボランティアは、社会共通のテーマであり、実施の仕方を模索する必要がある。 ・コロナ禍で図書の貸し出しも難しい状況で、図書館だよりの活動は有効である。																	
次年度へ向けての課題	・行事の出席率を上げるよう工夫する。 ・コロナ禍におけるボランティア活動の実施方法を検討するとともに、生徒の部活動やボランティア活動などへの参加意欲を高める工夫をする。		・読書習慣を育てるためにも、HRや授業時間を活用して、図書館利用の宣伝と利用方法の周知を続けると同時に、蔵書の継続的な点検整備が必要である。 ・コロナ禍における衛生対策・感染予防対策の徹底を図る。															

評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:どちらかというと達成できていない D:ほとんど達成できなかった

重点項目	検定取得			
重点課題	・「情報ビジネス科」：専門教科の学習指導の充実と学力の定着を図るため、各種検定試験に対して効果的な対策を行い、受検率と合格率の向上を目指す。 ・「生活文化科」：主体的に学習に取り組む態度を育成するため、被服、食物、保育、情報の各分野において、各種検定試験に取り組み、合格を目指す。			
現 状	・生徒一人ひとりの事情により、文章の読解力や計算能力など、基礎力が不足している生徒がみられる。 ・簿記や情報処理など、論理的思考力や計算能力が必要な専門科目において、内容の理解が若干遅い生徒がみられる。 ・社会生活への関心や問題意識がやや低い生徒がみられる。 ・生活体験が少ないため、生活に必要な知識や技術があまり身につけていない生徒がみられる。			
達成目標	「情報ビジネス科」における各種検定		「生活文化科」における各種検定	
	受検者の合格率 70%以上		受検者の合格率 90%以上	
方 策	・生徒個々の理解に応じた指導や教材の活用を通じて、基本的な学習内容を確実に定着させ、更に発展的な学習内容への関心と意欲を高める。 ・関連する授業の充実に努め、学習効果の高い教材を活用して受検対策を行い、検定合格を目指す。		・各科目における体験的・実践的学習により、基礎的・基本的な知識と技術を習得させる。 ・各種検定の合格に向けて、自主教材や過去問題等の事前学習に取り組ませる。	
達 成 度	・合格率 58.1%		・被服、食物、保育の3, 4級については手厚く指導し、100%の合格をほぼ達成できた。	
具体的な 取組状況	・新型コロナウイルスの影響により2か月間の休校となり、実技指導ができず、課題レポートは前年次の学習内容の復習など、知識中心の学習指導にならざるを得なかった。 ・6月実施の珠算・電卓実務検定においては、3年次で1級取得を目指す生徒のみの受検となった。		・実技試験においては、個別指導や放課後補習、家庭学習によって実技の定着を図った。	
評 価	C	・全体合格率は58.1%で目標を下回った。内訳は「珠算・電卓検定」74.3%, 「ビジネス文書検定」65.9%, 「情報処理検定」35.9%, 「簿記検定」38.2%であった。	C	・新型コロナウイルスによる休校や予防対策のため実習や実技指導が思うようにできず、各級ともに上位級での検定指導が困難であった。 (全体合格率 79.8%・3・4級のみ 88.3%)
学校関係者の意見	・コロナ禍で指導が十分できなかった中で、合格率が昨年より高くなっているのは評価できる。 ・オンライン教材の作成や活用は、休校への対応に限らず、通常の授業でも利用できるもので、積極的に取り組んでほしい。			
次年度へ 向けての 課 題	・次年度も新型コロナウイルスの影響がなくなるとは断言できず、休校となった場合を想定しオンライン学習の教材作成に取り組む必要がある。		・合格率の低い級では、指導法を工夫する。 ・新型コロナウイルス対策や、休校にも対応できるような課題の選定や教材の準備等が必要である。	

評価基準

A : 達成した

B : ほぼ達成した

C: どちらかというと達成できていない

D: ほとんど達成できなかった